

子どもとの出会いの中で学ぶこと

⑦

水 沼 昭 子

園庭の一隅に数本の松がある。一学期にはほとんど子供達の視野に入らない松。二学期も運動会が終る頃、毎年のように、この松に年長の子供達が登りはじめる。木登りは二学期と決めたのではないのに、きまって運動会が終ると、一人、二人、と松に登りはじめるから不思議である。

そういえば、一学期は皆、集団生活の中で自分の場や、遊び、仲間をみつけるのに夢中で、その動きも砂をいじり続けたり、固定遊具で遊んだり、自分の手の届くところ、自分の今持っている力の及ぶ範囲で園生活を過していく。一見安定してみえる一学期の中で、子供達は満足感や征服感を味わう一方で、思いがけない失敗、アクシデントに遇ったりしてすごす。そうした後の二学期、自分の過して行く時の前後が少しずつわかり、仲間と出会って生活が広がって来た頃、彼らの前に松の木が見えはじめてくる。そんな気がしている。

この松は、なんとなく「さあ、登ってこい」と呼びかけているような姿をしている。根元から二、三メートルは登りやすいカーブが続き、そのすぐ先が一寸、ひと休み出来そうに

安定した枝になり、あとは左右に小枝を広げながらのびている。そんな松が三本かたまってある。

登園後すぐに、三人の年長組の男の子が木登りに挑戦しはじめる。はじめは一人一人が「僕が先だ」の「お前はまだ」だと幹のまわりで騒ぐ。三本の木の内、子供達にとって登りやすい木があるらしい。騒ぎが一段落すると、鬼に角、それぞれ登りはじめるが思ったほど簡単には行かない。靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、素足になる。そうした工夫の中で三人共右往左往して結局、一人が登り、あとがお尻を押す係になる。けれど、登る者の力やリズムと、押し上げる者のそれが上手に合わない、これもむずかしい。自分達の背丈位のところで三人がキャア、キャアいいながら、まるでお団子のようにくっついていて。ふとした弾みで登るきつかけをつかんで登りはじめる。押し上げる二人は大喜びで「大丈夫か」とか「気をつけろ」とか、いさましく声をかける。上の者はそうした声援など聞かえない様な固く緊張した表情で手や足を動かして行く。その内、例の安定した枝のカーブまで行き着く

と、枝に股がり背中をのぼす。その時、はじめて「ヒヤア」「キヤア」「キヤラメル・コォン」などと歓声をあげる。ドキドキした、うれしい気持とこわさの混った声である。下で遊ぶ子供達がその場に集まってくる。にぎやかな松の根元へと、歓声の主は緊張しながら、一手、一足を運び帰ってくる。「大丈夫だったの?」「やってみようか?」「平気?」ロ々に木登りへの評価をしながら、女の子も男の子もしばらくはこの遊びに取り組んで行く。

ちょうど、こうした時期に見学にみえた方から安全教育をどう考えているかと問われた事があった。決してその事を軽んじてはいないが、木登りはこうした方がよいなどと前もって伝えたりはしていない。せいぜい根元に石ころはないかみておく位、又は「せんせい、木登りしてくるよ」と伝える約束がある位である。子供達のどの遊びにも、余程の事がない限り前もって、道すじを示そうとは考えていない私達の現場では、木登りも同様である。

日頃、子供達の行動をみていると、これからしようとする遊びや行動に、きちんと自分の力の「ものさし」をあてがっているように思う。彼らとはじめて出会った時から、園生活のいろいろな出来事の中で、その子の姿をとらえていると、「あの子なら大丈夫」「この子は少し助けよう」その呼吸と、子供達の「ものさし」とが合い通じる——そうした時期、二

学期に「木登り」がはじまる、その意味がなんとなくつかめるような気がする。

自分で判断して身を処すること。原始的できつと、はじめから持っているはずのこの力を、その芽をつんでしまわずにくりひろげる園生活、私達の安全教育はそうした事の中にあると問われたら答えるだろう。子供達にとって始めての集団生活のそのスタートから、その子の遊びや過し方のベースを認め、その中で出会う小さい危険をたくさん彼らなりに受けとめさせ、考えさせながら生活させて行く。私達は心をかたむけながら、手や口を出さずに居合わせる保育者でありたいと思う。

私も松に登ってみる。下で見守るよりもはるかにむずかしい。けれど、松の小さなくぼみ、出っぱりが登る者をはげましてくる。足をかける場や指をかける場として小さいくぼみが無言の内に役わりを果す。登りきった気持は、まさに「キヤラメル・コォン」だ。二学期の中ば、この時期を選んで、自分に挑戦するかの様に木登りをはじめる年長の子供達の内面の充実を感じる。松の木の下で待つ子供達のところへ緊張しつつ手足を運んで降りながら私は新しい発見をした様と思う。

(千葉・愛隣幼稚園)